



澗 血成波 鬪 蘇 吞蛟

深

游魚樂

不知

一齋齋
遊魚樂

於 松竹屋
次女の
輸耶

うらゝゝ
みまゆ
かこれの州
まれや
まけき
まこれ
まこれ
まこれ

北條の臣
其臺原
頼太郎



○大
多
屋
愛
妻
於
好

別
代

甘
之
露
玉



ふ
海
く
く
新
歌
行

○大
多
屋
の
二
男
伊
佐
五
郎

○大
多
屋
の
本
妻
於
驕

萬葉集
羈旅誦

庭ありみ

河湏波の

神に

小柴き

あまのこゝろをむ

かゝる

まをに

山崎



雪^{ゆき}廻^{まわ} 嵯^さ峨^え廻^{まわ} 假^{かり}寐^ね卷^{まき}之^の十三

東都

松亭金水編次

第二十五回

再^{また}説^と志^し東^{あづま}兼^{かね}志^し希^きが^が孫^{まご}物^{もの}を^をま^まる^る人^{ひと}い^いる^る場^ば町^{まち}有^ある^る松^{まつ}
竹^{たけ}屋^や鶴^{つる}あ^あの^の方^{かた}小^こ柴^{しば}の^のき^きん^ん先^{まへ}さ^さか^かむ^むゆ^ゆは^は非^ひ明^あ日^ひハ
女^め見^み田^たの^の又^{また}あ^あみ^みを^をせ^せん^んと^とい^いふ^ふを^を放^{はな}先^{まへ}以^もゆ^ゆま^まう^うし^しと^と通^{とほ}
す^すお^おあ^あの^の方^{かた}あ^あい^いよ^よめ^めを^をこ^こが^があ^あい^いと^とい^いゆ^ゆ。史^しを^をい^い何^{なに}根^ねゆ^ゆ
あ^あね^ねり^りけ^け。丁^{ちやう}度^ど的^{てき}日^ひ廿^に五^ご日^{にち}で^で。荏^{えん}柄^{がら}の^の天^{てん}神^{じん}の^の田^{でん}原^{げん}

あつてさうして引ささう丁度そきも落柄の天神合
日由まゝこの地内左指して見まは天神のおひき合せ
で前さう結をくして居る縁ごとに見えらると指に款
びて煙糸をさすせ居るおらう「サテくお指をささう
まゝさうらう。サア彼方へ入ッておのま。さ場町さうい主人
と女思心。その他に侍女気が二個糸のて居るさうらう。お
きつま
さする
煙糸をさすまゝに立あうりゆつさうて見えさうさうの。た

後へおけが指あつて席を譲りて初対面の挨拶ゆい
町邊へ女思の方へ三糸をさすお耶蘇の首を屈めさ
おらう一照りさうらうお深げ物をゆいささうをさすあが
了。後の方の襟干お修さうて色をさする侍女二個と
その右おは。傍をさすおはは修さうて一個の侍女おは
聲を「おお耳さあを擽いささう。お指さうてさういささう
おはさうてお耶蘇の侍女の膝を尻つてさうらう
疎さうておは見えさうねエ。アレ彼方のさういおを指へ



けきど。まゝ祝状の由お遣せん。シテ見せぬアはと不
振あつて知れぬ。焼敵を池へ投ぐや。海へ
流らぬアおつて。昨日おあつて笑つての兄合といふの
由。西規定。笑ひ先せ申んで。何卒縁を組といふ。
先々さう言つていふ。おあ不存。子細はあつて。是
おあ不存。人ごぢぬアおつて。その癖。小合の口邊。どうも
自己少いから。おあ不存。何と云ふ。官話。り
と。孫物が。その程。りして。種と不。返。從。煙。為。出。初。歌。

不。い。あ。き。う。う。を。今。更。不。ま。い。ひ。あ。ま。を。云。葉。不。ま。く。
酒。狂。の。晒。落。不。筋。り。さ。ん。と。ま。ま。ま。ど。申。可。ね。振。を。希。い。不
孫。を。逃。め。美。敷。不。あ。り。一。コ。サ。晒。落。い。ま。の。舎。ん。ま。想。ま。う
笑。度。ヨ。毛。う。う。帰。つ。て。あ。祝。不。答。子。い。何。振。ご。と。は。ま。ま。と
時。その。振。振。不。田。園。ら。ア。未。お。あ。の。云。葉。不。嘘。の。あ。る。也。
古。振。と。見。つ。ぬ。ア。松。竹。屋。が。二。枝。の。舌。を。ま。る。の。う。ま。ま。と
他。不。秋。也。の。あ。る。う。お。あ。い。年。未。祝。状。同。お。あ。易。く。ま。る。
といふ。う。その。肉。幕。の。初。の。や。居。り。遠。不。絹。を。忘。せ。給。へ

ゆきこ今なきし不詮方うしてさけくはらひく伯母なる
を大切なり。そのかまふ事不憚らふまゝ。老を由蛇をゆその
ふ不ゆ花のよとどろをさきた。據はふゆまことそのことと
いふ會も不憚りなるゆふまゝの他なる。ままこ殊の雅
歌とがひるひあるまゝに。絢綾の且強肉くひて所所
まゝに。美見りてそのかまふ事と進以へ」とゆふつけし日禰を
る。か憐ごとを按じけり。以てそのありけしは縁後丈あるの
ちうか憐へも。聞て若後あるまゝに。寧ろと事あるがに。

挨拶いあひぬきで。後ゆてお好か蓮ある。その時をまゝ
とまゝに。まゝに。若也布の。淋く十七嫁を娶の。八好ありどすのが。
目形の内なる。佳方あり。然りまゝに。若人。モウ二こ
年延して。をきてまゝに。た招ありらうが。僥倖あり。彼
女児を。娘の。あどとりひもの。ごう。何でも。ア。見の。中。次
才。彼。不仕付く。始終の。割が。かめり。目形も
年い。まゝに。若也布を。絢綾へ。遣て。この。伴。佐。五。舞
を。家。智。小。ま。ま。ま。丁。度。初。合。が。宜。け。き。ど。人。の。ん。ん。



伊佐五郎
 愛を
 於橋
 日々に
 訪ふ

いさごろう

いさごろう

いさごろう

持くサ。先以由交とあり不。左指あまのつらう宮らう
と。老爺さんが年不引くけ。云出てもんさけきど。彼
ハ頼不生ささこの。殊不か耶麻がつらきき紀念
この跡を継せまけつらア。死んど人へ由義理が海ね
と。モウくまの心中ぞてサ。あー何が何根あるのさう
明日の工へおきあひと。アてお好由その細不。細子念
せと彼見と人を織るが尋常の女の僻めてあね
べ。于茲臺末撤ち糸ハ必ひゆる松竹屋の。お耶孫

ハこの次第に初へ大うと縁を組ぶうこの。字をまきま
拓きさ不。安末に及いぎ採物の。人集めて彼方へ由。
いと惜くふらひるさう。何指由出圍が写くあり。ぬく
て見ると後くまごん障りのと散不。まづあるとの口
後不。撤ち糸が親とい。ハテ残糸とさうとさう。伴に併
しが併ふおのい。撤ち糸が胸のらち。供何根とさうと況
吟をさる不。不馬とひる俳諧陣。茶樂ハ日未出入さる文
のこあさる不。死不今の。妻お好が世話人あり。この以中らう

新あらたのちあアアモモシシ系けい目め物ぶつ人ひと由よし理り屈くつハハいいせせんん子この
 権けんののままままいいぬぬでで何なに処ところままをを由よし押おつつりりごご新あらた詮せん何なに指さ不ふ
 りりいいてて新あらた遠とほのの懐なつかるる氣きききひひももああるる。今いま処ところハハいいせせんんと
 魚いさな老らうがが衣え衣えのの某たが染せんとといいひひりりんんででいいせせんんままんん。とといいふふと
 天あま氣きがが昇ありりああままけけてて来きりりままししととすす。何なに卒そつモモウウ
 降くだりりししとといいははせせししまませせんん。おおりりああらら六むのの鐘かね
 ボボラランンクク

嵯峨迺假寐卷之十三終

雪ゆき迺の嵯さか峨の迺の假かり寐ね卷の之の十じゅう三さん終しゅう
 耶や麻ま 嵯さか峨の迺の假かり寐ね卷の之の十じゅう四し

東都

松亭金水編次

第二十七回

松まつ系けい立たちちるる亦また六むがが門かどににとといいひひ一いつ車くるま齋いひてて千せん年ねんののああののとと
 今いまいいせせんんのの輝あかりかかままりり。春はるハハ急いそぎぎにに松まつ板いた堀ほり又また敵たての
 松まつのの樹きののままよよりり。板いたのの欄らん干かん者ものままままいいとと肉にくどどややいいままかか均ひと
 女むすめのの髪かみささええここししるる言こといいははししるるいい。松まつ若わかとといいふふ酒さけ樓ろうををまま
 矣やままううとと下した坐ま敷しきいいとと密ひそややりりああるる兩りゆう個このの客きやくハハかかのの櫓やぐら

お希と共染むて。お灼の少女ふらちむらひ。モウ殺ハ
こと際り。解まり。非嘉がふお扱ひどた。料理ぬふ左振
云て来末何ぞモウ仕舞どつて。何振う転向があど
らう。何ぞ二種おらう。玉史して。出て呉末とよく云。然て
今、用由移らう。どの殺の出来るまで。休て居て扱て
来さる。一「イヤお目ね。モウおさうあひ。是で。宜ぢあアで
まひま。せん。概「ナ。井とまを。宜小由ら。解まり。麻末お執
扱ひどつ。自己どつて。あのかへ。今日始めて。来ぬア。まひせ。

月小二回史之回ぐい。寂さぐ来る客人と勿論。若小
ゆある。あけき。まど。左振。易く。ま。ま。あ。ア。世。務。ど。ト。ま。
五六かの。碎ふ。小何らの。まんと。まを。押へ。一「マ。マ。イヤ。何。振
ゆ。あ。昔の。ま。合も。思ひの。他て。ま。ま。ま。を。左。振。ま。ま。ら。う。
あ。あ。ア。可。嘆。ぐ。平。生。大。事。の。お。あ。と。ま。る。の。ぐ。近。所。の。落
の。勅。平。刺。殺。の。お。ま。の。防。風。を。ハリ。ボ。ケ。あ。ん。せ。と。り。ふ
族。を。扱。ひ。つ。ひ。て。居。る。り。ん。さ。う。ら。ア。何。振。ゆ。収。ま。ま。ま。
せん。サ。ア。く。ア。兎。ま。ま。く。解。て。お。青。を。左。振。ま。ま。ト。の。先

まして少女を立て申。跡見送のて見示と「正」
と此今の形造の奇藤をさすね。モウ
一五年年と日あり。実小男教とのんご
モウ十日十五と。イヤ時小形造とのんご
地月を可老さう形造を月と。手後何根と
うあらん「何とさくまを可老さうとア」
年の比十六と云て十七あり。まごあると
造が陸おた後未身かといええと老爺らい入ら

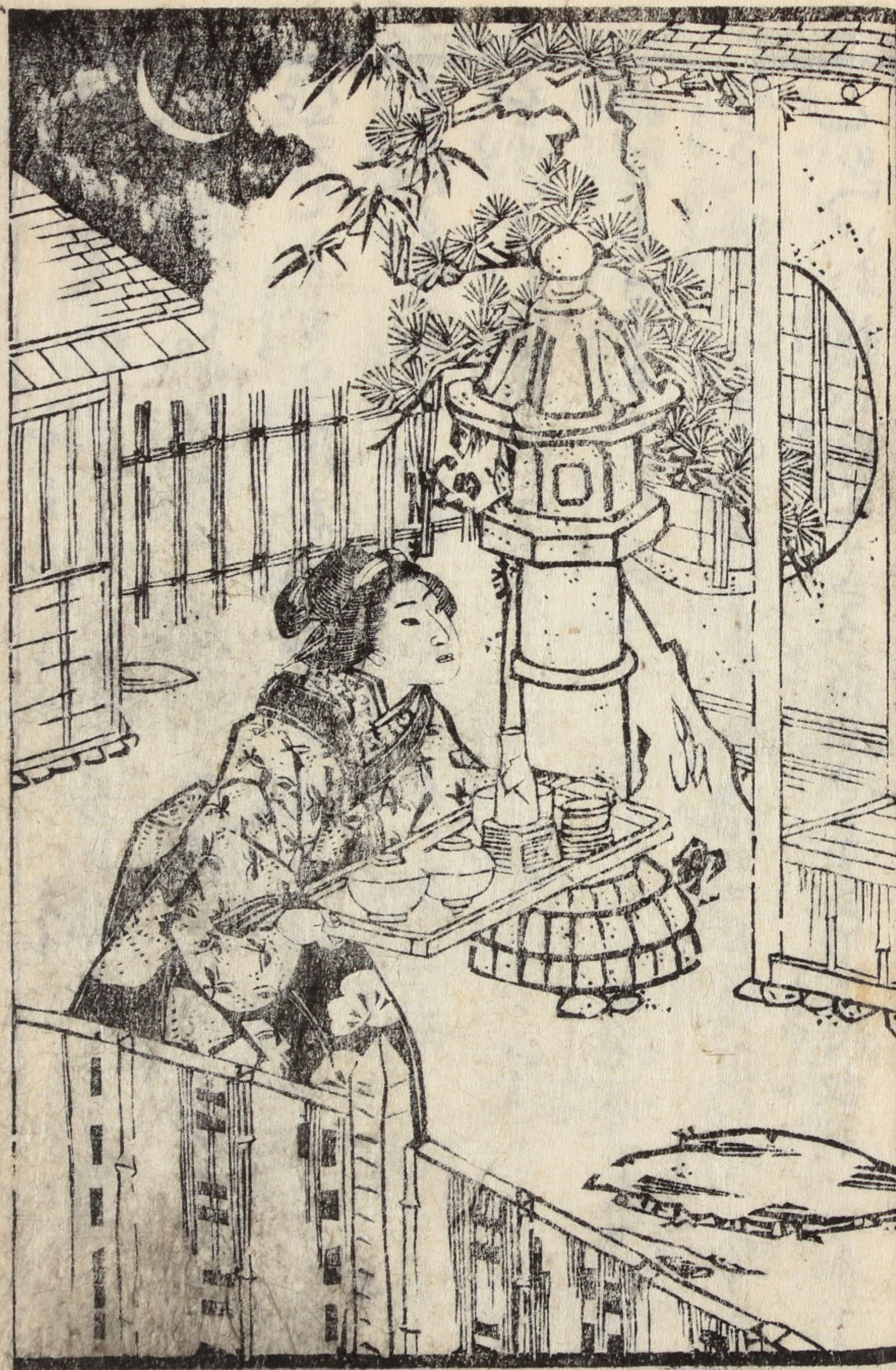
連を供由二三個居とやう子ご。然由二十五日の月
縁日ごうと縁也くふ人の出盛る最中ごうと。まごその
新造の標致の結さまアちあのと田之助未ごうと
へ由考はまおとのん考ごうと往來のんごうと
て見ぬものあり。形まう以不佞ある也。実小男
まる位であるごう。何根あるごうと出。抜ふを
う例する也。眼を白く黒くしてはくは泡を吐き
を頻りふらごうと立て狂ひまゐるのごう。イヤ
肝心の節由

何れも九折こま小こ七しち特とくげげののササ。多た処じょをを連れんのの老らう爺や。供く由ゆ。
種しゅとと小こ七しちととけけままどど。何なにかか収しゆまるまる気けままののああ。弁べん原げん茶ちや。志し
おお由ゆ泥でいででけけ。湯たうくくののめめてて抱だかかてて二に三さん個ことと水すい茶ちや。志し
多た摩ま。提ていきき揚やう。交かう授じゆののここ。陽やうままととのの入い秋しゆああアアののまま。毒どくああ志し
我わ依い万まんのの人にんががままてて樽そんくくととままままるるりりんんどどろろ。そそのの老らう爺や
由ゆ送そうととああるるてて。面めんををまま赤せきあありりてて居いららけけ。吾われ併べいちちののりりもも
乳にのの毒どくささ小こ此こ方ほうのの茶ちや店てん小こ標ひょうををひひてて茶ちやをを二に三さん杯はい飲いん茶ちや
がが。影かげをを吸すいいのの女によ見みいいるる場ばう町ていのの松しょう竹ちやく屋やのの次つぎ標ひょうどどと

りりももろろろろ。全ぜん体たい左さ振しんのの人にん病びやうががああるる時とき々々發はつるるのの人にん
ととああるる。そそのの根ね本ほん病びやう持ぢをを人にん影かげへへ連れんぶぶ出でるるののがが。ママアア。冥めい治ぢ遠えん
ひひとと子し。大だい方ほう人にん類るい痛いたととのの人にんののどどららうう。五ご宗そう通つうのの標ひょう致ぢもも。
百ひやく人にん小こ俵ひょうつつとと女によ。左さ振しんのの人にん影かげをを持ぢととのの人にんのの。何なにののろろ
因いん縁げん也や。ああるる也や。せせううねね。エエトト。突つてて其その樂らくいいふふ小こ孫そんささ。一いちとと也や。
恙しやう且かつ物ぶつ正せいままててととせせくくままんんククトト肝かんをを淫いんとと教けうつつきき小こ見み
のの境けいののとと者しや併べいググ連れん小こ見みんんどどののララ遠えんくくねね。何なにとと也や。
室むろ小こ肝かんをを淫いんくく。一いちイイヤヤ。杆かんのの淫いんままるるどどんんろろ。ままアアををああフフ

大變ご一三何様とんぞ松竹屋いん易くせむさる
人う一三易老いん易いと中せむとせんとせんゴト何い
なひて口隠しと相按ト気ある教をいんて「イヤ何ぞ
君命ごうとを根末とくい知らんあんとを徒名取い
一件ごう。浮世場へ小云とんぞ係るんて大ア世間ご
突こころいづるいんせ用。ナシのうづる人の世を、宗道
がまご他へ云て、其ゆ子。ア大さ小碎ごごまご皆く
約るてい所を立出けるぞ。某樂い家小傳りて中。ごさ

るの氣小かご。既小一昨日大變屋より。納茶を傳り
しと。ごの老小存てうく知つしと。我る小左折りて疾ひ
のある。嫁をとりてい大家の世。垂小とあるは丈お妻の活
あて見んとその疾の明るを。候りて彼歎くあまうご法
らちつけ小此ごまを。ごん由り海ありとごひまのむ孫が
る舎小ゆき。さるるを物語と折を見ありせ丈お妻の
ふ。ごあゆま中い庵く。箇折のしとを言あまう。を言て其
い不實也。ごう。お好む傳りさる。小連りせんごありひが。



其樂
を
欺き
林太郎
縁起
よく

吉の家小の老爺さうが犬殺びて今まて長けをうと
代をかりし月出ふとをきく。近曾の足由不自で疎
余の性由せん宅小をうう指しけきど。茶の希小指が
来う。見取付て見ゆや。あゝねと。犬樂あこゆあてで
ぎると。実小をうやア見るやう。世捨らうてばいらうと
後あがら茶いらあふ。さ怒くまを指あてをきく
日あやア老来小がううさせる由疎小の毒あうそ
やアア定であらう。克穿敷塗してお透あう。まをさ

の商儀サ。全將の十五六の二日とゆ原どう。引取
うと様物の。之平小も窮してをう。左振りゆあ
マア。延して。誰どふう。笑してア。サテ。折角安んを。
志がるとかりつ。まをさ。根あさ。支えがある。あやア困
る。あう。自己いた振かり。せと平。ごつてゆ。あゆ。幼推
とたう。出入。ゆま。ま。先。ゆ。史。ゆ。未。後。ゆ。指。を。知。ん
款。七。他。の。ゆ。子。ゆ。ま。る。苦。ゆ。想。疑。ゆ。何。振。ゆ。世。念。ゆ
か。ゆ。終。ゆ。一。ゆ。ゆ。あ。ア。私。ゆ。人。の。窮。ゆ。て。あ。ま。ゆ。の。ご。う。う

を赤くしきまきと不持運をまき。日中次小ありて赤く
うまき。赤くしきまきと不持運をまき。日中次小ありて赤く
鳥吉父を供つて歸りて赤くしきまきと不持運をまき。日中次小ありて赤く
の人を不中。玄釈ありて子舎不入。宇を赤くしきまきと不持運をまき。日中次小ありて赤く
あて。赤物を解せあてまき。赤くしきまきと不持運をまき。日中次小ありて赤く
見合せと赤くしきまきと不持運をまき。日中次小ありて赤く
今日まき。陶後まき。赤くしきまきと不持運をまき。日中次小ありて赤く
不持り。積る奇蹟。赤くしきまきと不持運をまき。日中次小ありて赤く
と。赤くしきまきと不持運をまき。日中次小ありて赤く

奇ららるる事あり。新河枕と小馬の扉を穿く。いぬまき
さのしきまきと不持運をまき。日中次小ありて赤く
まき。赤くしきまきと不持運をまき。日中次小ありて赤く
のサ。古根子。赤くしきまきと不持運をまき。日中次小ありて赤く
あて。赤くしきまきと不持運をまき。日中次小ありて赤く
を採りてまき。赤くしきまきと不持運をまき。日中次小ありて赤く
史。赤くしきまきと不持運をまき。日中次小ありて赤く
あて。赤くしきまきと不持運をまき。日中次小ありて赤く

を傷ぜん氣不のうしうの誦がうし不實りてめて文皮由
十分精ひひ日限究しひ誠を今日ひくし待りど不
二平素のそ大を危めて世き一命のあつたふ小今ふ一
延引あまとい方より沙汰をせんそまをい念せのり
べしと何とあくの誠けまは供へ通せぬ親類をどふ大
病人を由出来さうの何とふあはさ一命とあつたふ見
非母あし日毎の業はゆさう止てその沙汰あるを
あつたふ春日當りて日長さ夾さ一過て月不

五月雨粟生の花の斑くと墜てやうく五月雨の晴を暮に
暑さを倍し暑さうてまの冬熱小人の昔む水五月迄
猶その半とさきど大々屋より沙汰由あ。お耶精の
始め糸の糸をうける時より候のいと暮れとかひひ初
め。小雅不神佛。念考甲斐不縁祖の良美あく替ひ
候。さい何不念えん方由あ。そ人多はは揚をうて
その月を候し不るひき丸。形延く不あんとあふ不能て



衛女ども
 うちあて
 お耶
 病ひ
 輸
 を
 なく
 さむ

女見ぬ不。恙こそ限小ありとの申。ありあはれを不
せん。人のあへ申。恥がましき。任家とよきをば。恙ふとも。恙び
ごつた。意の欲。一。ぶ。面。あ。ま。う。り。小。麻。の。角。の。糸。の。る
申。高き。い。ぢ。ぬ。その。人。不。祝。と。さ。申。恨。い。ぬ。う。と。ん。の。物
安。木。ト。持。う。く。て。今。い。ま。ぬ。合。合。の。申。を。ま。ぬ。ぬ。ど。不。あり。
人の。つ。ぬ。る。い。子。舎。の。隅。小。勝。き。方。不。才。を。傳。て。臉。不
深。む。涙。さ。拭。ひ。申。あ。ぢ。ぬ。い。結。が。つ。き。是。不。痛。ひ。の。林
不。外。う。始。め。い。異。さ。不。申。つ。う。と。ま。く。も。あ。け。け。き。と。

弱。あ。ひ。は。母。親。を。ど。め。怖。申。妹。申。移。ま。り。て。医。原。を。招。き
容。辨。見。せ。て。その。看。病。さ。い。あ。り。あ。け。き。と。元。氣。持。上
い。物。さ。る。飛。子。い。全。枝。赤。難。さ。ん。と。医。原。の。い。ふ。ふ。ん。を
痛。め。て。そ。只。管。不。按。ぶ。る。の。こ。ま。い。後。方。申。あ。う。ざ。り。け。り。
右。方。さ。る。ま。不。夏。申。すぎ。秋。さ。い。園。を。新。夕。い。袂。さ。い。し
風。の。吹。く。糸。不。月。半。と。あり。け。き。と。物。病。む。人。い。祝。せ。ん。
然。と。し。悔。この。強。く。申。あ。う。ぎ。侍。女。ど。申。交。替。森。る。不
来。り。て。伽。を。あ。い。お。嬢。さん。今。あ。お。月。見。が。あ。り。

まはるゝんたれと平さるるまて中をわけて月日見おありする
もろの年か月日見おあり移りて先さぬをゆき後ほ
とぞ何れゆアハカ まはるゝんたれ ともなふ。五目也と目ふ。か快
くいかあんあさるまゝ困つてのものとて居まゝと云ふ人的一
左様くホニそのことをか様さんおまのしあがせ。おくお
快くかあり花をんアうふ。さうと存て居まゝと云ふ
を扱てつ人を唆。お耶頼の若ん示笑入を食て一何ぞ
ね上をさうり。その人の言ふ唆さう。先のか方が外お

まはるゝんたれと平さるるまて中をわけて月日見おありする
もろの年か月日見おあり移りて先さぬをゆき後ほ
とぞ何れゆアハカ まはるゝんたれ ともなふ。五目也と目ふ。か快
くいかあんあさるまゝ困つてのものとて居まゝと云ふ人的一
左様くホニそのことをか様さんおまのしあがせ。おくお
快くかあり花をんアうふ。さうと存て居まゝと云ふ
を扱てつ人を唆。お耶頼の若ん示笑入を食て一何ぞ
ね上をさうり。その人の言ふ唆さう。先のか方が外お

根ふか^ん氣^きづ^きら^らく^くと^とお^おち^ちら^らみ^み柱^ちを^をの^のぐ^ぐか^か傍^はふ^ふて
さ^さく^く盡^{じん}群^{ぐん}す^する^る悔^{かい}しく^くつ^つて^てあ^あら^らま^ません^んハ^ハ一^一更^{せい}で^で申^まお^おは^はれ
ゆ^ゆせ^{せい}ん^んの^の後^ごで^で離^り縁^{えん}さ^さま^まの^の面^{めん}を^をひ^ひて^てま^まる^る他^たへ^へ入^い
が^がこ^こま^まる^るの^のう^う。彼^かれ^れ冷^{れい}祝^{しゆ}ま^まハ^ハ一^一更^{せい}い^いて^て申^まお^おは^はれ^れ納^な茶^{ちや}を^を讀^よま^まは^はす
掃^{そう}同^{どう}あ^あら^らハ^ハ一^一生^{せい}ふ^ふ二^に人^{にん}の^の夫^{ふう}ふ^ふん^んえ^える^るハ^ハ和^わど^どと^との^のう^うら^ら。吾^{われ}
儂^{なん}ハ^ハモ^もウ^ウく^く何^{なに}れ^れ亦^{また}あ^あら^らま^まの^の申^まお^おは^はれ^れ所^{ところ}へ^へ返^{かえ}付^つけ^けし^しあ^あら^らハ^ハト^ト女^に見^みの
一^い徹^{てつ}あ^あら^らハ^ハ敷^{しき}め^めら^らる^るて^て居^いら^らし^しけ^けり^り

嵯峨迺假寐卷之十四

雪迺 嵯峨迺假寐卷之十五

東都

松亭 金水 編次

第二十九回

人の^{ひと}被^かひ^ひ施^せり^りて^て又^{また}あ^あら^らと^と昔^{むかし}の^の人^{ひと}の^のい^いら^らひ^ひあ^あき^きけ^けん^ん施^せり^りて^て
不^ふ知^ち己^こあ^あく^く。疾^{やく}病^{びやう}不^ふ罹^らひ^ひて^て或^{ある}ハ^ハま^まる^る。以^も用^{もち}不^ふ盡^{じん}て^て折^せ髪^{はみ}
不^ふか^かた^たハ^ハま^まる^る如^{ごと}何^{なに}と^と申^まは^はる^る方^{かた}あ^あら^ら。毛^け合^あま^まる^るよ^より^り他^たあ^あら^ら
を^を被^かひ^ひ人^{ひと}様^{さま}と^と申^まは^はる^る。ま^まを^を被^かひ^ひを^をり^りて^てい^いふ^ふあ^あら^らと^と申^ま
と^と申^まは^はる^るの^のか^から^らま^まる^ると^と申^まは^はる^る。若^{わか}し^しあ^あら^らハ^ハ耶^や鞠^{きよく}を^をり^りて^て妻^{つま}と

せんとおひ定め。お耶頼のまことの人ありて、まいかの
とふ不救の互ふおひ結する申の、倭人ともが奸計にて
妹脊の神の結びて、縁の糸目もきまじく、おあんと
ままご女子の、脱不病ひふり、業の下燃こぶして、今
はち、稍不神も弱るとゆく。その在さぬを、つるふつ、
同胞の業、苦し。子の達く、けとまじく、お今抱まじ
ど功強もあ。然とて、かる物のあ、存ありて、まじく、
バ。病の本さ、病ありて、醫師も、まを舎を、うり、あり、又

恙や病もあ、く、お人あ、こと倍あり、お橋が、日未
の、氣想、つ、く、ま、生申、頼あり、要る、あり、恨不、苦、方、の、結
と、か、の、ひ、く、とも、他、生、の、縁、の、お、不、結、なる、妹、脊、中、お、耶
頼、を、つ、く、より、何と、あり、いと、慕、つ、き、心、地、せ、く、ま、を、呼、び
速く、目、を、今、日、聖、と、候、とも、何、の、沙、汰、日、あり、救、多、の
月、日、を、送、り、く、え、折、不、福、ま、て、く、字、を、年、と、何、指、し、と
秋、と、密、更、く、お、く、ち、結、ら、く、と、是、母、ま、ま、ら、く、あ、る、條、あり、
お、延、く、お、あ、る、と、い、ふ、と、知、る、と、く、く、定、め、く、と、ま、ま、お、橋

あつと。史く一向沙汰あり。モウ私小引取。えんま
きて紙を苦む。ゆ放まくた招引あり。四苦芳あり
そ方性。よく四容子をけてる。史小指を種々
か窮し。ゆりまいて。史く。私。懇く。あつと。んぞ
が。ま。ん。く。た。招。り。そ。史。ア。四。苦。芳。イ。ヌ。を。ま。お。の。種。々。あ。ん
い。ま。は。私。の。在。障。が。あ。り。て。ま。ん。く。と。延。て。飛。ぶ。が。定。方
で。の。招。り。の。氣。が。備。役。も。あ。り。て。紙。を。種。々。一。ハ。エ。を。史。ア。亦
見。招。さ。ぬ。ゆ。招。り。の。い。ま。ま。子。の。モ。ウ。彼。ま。て。小。指。の。也

ん。在障の何のとり次。史の答。えんま。の。ま。は。が。一。新。を
史小親が。あるの。史が。史。ア。何。ぞ。を。か。娘。小。史。で。の。対。て。居
ま。ん。の。エ。イ。ヌ。左。招。り。の。い。ま。あ。り。史。史。く。何。招。り。史。ま
て。小。史。の。て。ハ。テ。私。小。史。ア。あ。り。ま。せ。ん。ゆ。招。り。の。い。ま。て。ご。ん。ま。す
か。史。史。を。陶。後。の。目。招。さ。ぬ。が。を。御。ま。ん。史。の。自。己。の。モ。ウ。の。史
この。あ。り。八。十。小。を。く。ま。の。て。居。る。身。の。と。て。史。時。浮。世。不。来
ま。ん。と。か。の。い。れ。茶。也。を。く。史。史。く。久。ま。く。此。方。へ。呼。び。ま。す
け。ま。ご。モ。ウ。年。齡。の。い。れ。を。招。り。ある。と。史。史。の。跡。で。及



馬へ出て来るお情丈お忠の傍へ居る「榮膳さんお久
しからずにおあつた例へ。些の年のよろあいなご子」
株で病みかきせをば作まん。其儘こそりの心お忠の
今年ハモウお三十のひひて政へま六「七ふあるう仕
あ」
「おな根でございまん子。どうもよくおうまい若
ハ郎とお厄年ニ。今方と不きや。又る若いご子いませ
あ」
「あう例でゆえ。氣ハ宜う。自己赤ごゆ此頃ハ
ぬのきりと志氣ござせ」
「今ううを根ふとを女と逢の

て刀録万ハ百十ううが盛るといひます。名根あんとお惚ま
まハ二十五六うう。早除りの入お限るといひます。ヨ
お根ううまあう今うう。名枝実を根あや。併し孫を
出着と日あぬ。お祖父さんといひをさるうう。までモウ股人で
はまハア「ホニ孫といハ名務さん。おあハ今田家坊が
ぬのりてお出でこと子むけ根ふ延く。ある根ぢぢア
あひけきと。根あひるがあのを。使下ごんく。延の丹
志年ハ氣が聞しあうう。き根ふとをいひごらうが。お

お尋ねなす。何とおがり。巨ききさうト丈を連つが執うち
青やま。丈をのハ相系をさうして一丈がサ何指の表
をさして。あつと。些斗。のハ惜い話。さう。手廻が情
の彼のさうらうが。おあのの。のハ元ね。あ。のハおら
侍女ども。持出に酒と教。久。がう。甘。のを。の
飛。さ。と。け。ま。生。婚。今日。の。気。さ。の。の。
ま。の。ね。さ。さ。さ。見。で。ま。一。巻。お。あ。の。左。指。サ。の
の。訂。つ。の。候。小。遠。気。で。さ。の。ま。私。の。方。ま。さ。の。由。

お尋ねなす。何とおがり。巨ききさうト丈を連つが執うち
青やま。丈をのハ相系をさうして一丈がサ何指の表
をさして。あつと。些斗。のハ惜い話。さう。手廻が情
の彼のさうらうが。おあのの。のハ元ね。あ。のハおら
侍女ども。持出に酒と教。久。がう。甘。のを。の
飛。さ。と。け。ま。生。婚。今日。の。気。さ。の。の。
ま。の。ね。さ。さ。さ。見。で。ま。一。巻。お。あ。の。左。指。サ。の
の。訂。つ。の。候。小。遠。気。で。さ。の。ま。私。の。方。ま。さ。の。由。

あす あす 翌と。暇もして慰むけり

第三十回

さて翌日小ありけしむが管務いふ易うん。お情が子か
不承申すは夜の終るを夜よく述べ一サテ昨日お影一
うけの。お孫田さかの一件いふア何指り人おさう一合で。延く小
ありまへんう。お波せあまのせ下さうあ。こ。実不私自取
さあ。ややううごごいません。何指ふるてあらうと由。そ
延ぐお内痛のりえさう。か限一在るん候由る。後不さ

てのまあるに由。在伴小影くと。お作ても世さうす。まア
何指りふるてごごいません。切小百まへ。そのことお押置
おごご條小日あうんと。指めお好ぐ茶茶よ。波ことと
病気の影一。まご探を希のそのことを。知つて居ての
物指。せる小女もあいず。不。難病を。知つてあう。何指
とて孫不費しき。ア。いりり人の口。虚う。ま由定う
小知もびん人を教んを。推くと。空牙敷。してもの新が。疑
うくと。知まある。波。延く。孫と。波。管務いふ首と

傾け。皆くあつて教をあげ「さう、堪方たまたまの方かたの影かげ一
あつてを。西にしとあり。百ひゃくの勿な偏へんとさあせむと人を教しえん
 せきさくちや。あま。私わたくしの手て首くびをい。とつてア赤あか
あたまがど大おほる透とおひ。喧わんわんとらうと存ぞんまん。何なにおとてい。山さん後ごト
たつたま。はさなぬい方かたのお家いえ不ふ競けいぶ。まじとてせよ。あひま
おがれたまナ。法はふ分ぶんの大家だい家で。ごごひます。さぐ左ひだり根ねい。山さん病びやう。見けんのあ
さ方かたを人ひと互たがひのまゝい。新あらたく。驚おどる。小この案あんを。お歩あり。お連れん
 ぶ。さうといふ。おつ。あつ。ます。す。の。おぢや。ア。ごい。ま。せ。び。ま。つ。こ。此

方かたが。限かぎり。ま。せ。た。を。所ところ所ところへ。孫ひま子こ不ふま。さ。う。つ。て。あ。を。た。う
あまア。ま。ま。の。病びやうひ。が。一いち回かい發はつま。た。山さん離り。縁えん不ふ。あ。る。眼がんお。ま。ま
いを。初はつめ。の。物もの入いりを。う。け。て。知しを。新あらた不ふ。縁えんを。ま。る。親おやが。ご。ま。ま
せうりせうり。ホ。ン。ニ。人ひとと。り。い。の。い。の。何なにの。益えき小この。ま。ま。い。る。を。曹そうと
りて。新あらたび。の。邪よこしま魔まを。い。つ。ん。の。の。由よしある。目めの。み。さ。な。小この。左ひだり
う招まねき。う。し。ま。ん。く。う。ま。招まねき。お。こ。に。お。構かまひ。あ。さ。う。う。ま。を。ま。ま
お小この。案あん入いりを。お。ま。ま。を。が。官くわんご。ご。い。ま。ん。ト。類るいつ。て。い。つ。て。新あらた縁えん
り一いちま。ま。の。お。あ。一いち人ひとあ。る。ん。二ふた人にんの。と。人ひとの。ま。ま。う。ら。い。う。ら。

唯と云ふ所のいふまじき事あり。きき始人並で由あるの事何
 ぞ始ふ事あるの事子「とて小遣ひがあらませざア。成
 りどお辞由四をだいたいが何始してき始ふことかある
 ませう。然してどうせア其来さんどう。お好さんが愛ま
 とエ。其来さん何処を愛する。年まきや智恵のね
 ドレ。是ら見らる吾儕は。某来さんの初くまつて。是の
 是まを礼しませうト根強くしよ由やを希より。人の
 吟をよく愛し。空小父の鳥吉が方へいふ然らるゆゑ

見え来小由。月か物ぐる。とて小い何や邪。癖を去る人
 也あらんと察しや。女まらる由。羊猪に公。伶俐物と小。行違
 ころの故小。今回の使小擇ませしころ。史のこあらん。本意希
 が。後小あるは。お情が初を振。妻去く初つて居ることを
 ば。美史。今回の悪巧ことを。さるめ也あらんと。とて小い。ど。知者
 ま。くり。い。ふ。初。う。た。お。情。は。日。未。猜。借。て。羊。猪。と。さ。る。家
 隷由。同。根。か。り。い。小。よ。り。と。て。今。の。綱。の。拘。小。あ。り。て。親
 を。改。と。め。一。フ。ン。お。控。て。を。去。せ。エ。始。を。取。女。う。が。と。る。ま。い。が。

此のおおの世はあやアあうあいの早もえ老茶うう
まじりてあつていふにけりていふにけりていふにけり
ありの。然由あきあア何格ごらうと。おあ方おりい
ハあつて眼お角五てあつていふにけりていふにけり
子をとらうとてあつていふにけりていふにけり
個が補判しつて。史であつていふにけりていふにけり
一ををいふてよくあつていふにけりていふにけり
極肉く。其樂が云こといふにけりていふにけり

此のおおの世はあやアあうあいの早もえ老茶うう
まじりてあつていふにけりていふにけりていふにけり
ありの。然由あきあア何格ごらうと。おあ方おりい
ハあつて眼お角五てあつていふにけりていふにけり
子をとらうとてあつていふにけりていふにけり
個が補判しつて。史であつていふにけりていふにけり
一ををいふてよくあつていふにけりていふにけり
極肉く。其樂が云こといふにけりていふにけり



ふやまの母



藝勝
馬場町
染代
相遠江
ふやま

あつら 及びや 筆 さいと さいまら
筆務ハ會新トて「とまら 誅不カ 康来チあぐる。天交
屋うら 月不クけます。まら 妾細ノカ 新ハ不來チ
がう 私まら。まらうーおげまらトのハを咬「何う 町寧
あお 燭りの。おあ由まらカ 使ハ 四苦芳。サテ何うのこハ
きーあま。その春中不來チ 女兒を 山初 重チあぐる。不
務ハ 四月終由さう 極り。既ハ 四納菜ハカ 燭りト
ささ。びん万セ申 達チぬあぐる。衣取セの 他チえの 潤交
まら 急いデ 支及由い。月の元 極ハを 獲チて 飛ケル。

のち さらまらとさい ぬらうと まま ぐら
その後一向 四沙治ハあり。妹物不 喫チて 由何 拵り
あう 秋ハいさう 定めて 何ぞの 出元 筋ガ。あそこの
あう 入らう。爽由之 夏由さう。モウ 出来の 存その ち不
拵あう 是るハ 夏改の 思ハ 右と 察ハらま。拵あハ 日
外ら。納菜の 品々 お返ハ せし。びん方うらとて 四破
體を。まらうーとさうと 訳の外 小。腹を 立て 居ます
ガ。女兒ハ 耶輸ハ 昔儂 不似チ。一徹 未 氣象うらと
て。一旦 親と 親トカ 行チ。約束ハ ことの 夫ハ 拵らま

とてまこと他人縁づくらんさうふあひ。モレ左様ありば松が
思のお才子ふあつて仕度とりん。その心探の不使さふ。
まづ一目くと。四河法を使て由際限あり。既ふ今日
明日のうちに。孫物を呼て口破籠を。かうけ合中様
了。とまじ使あさひの通じ。納葉の帯の由。取抄て
並ましく。卜傍の隔紙ひき。害まじ。小舎の裡ふ並
べん。家内森多番より。耐大斗昆布壽商女松魚首
白髪の色。小袖小帯も堆多く。横累新。小指を

母 一とあ他小帯のと。魚のおめでさへて。さ音ふ。料既
して祝中。うちあてぬ貴就勿偏。今まであつま
ゆせん。是はまてお意お代料でお返。いまうはと。諸おの
はまうして孫まじ。今日ハ何の為の。お使ひの。あつません
か。私方ハとの通じ。祝中一同お祝つて。さ不便まじ
女見お耶執。是非女儀ふあるといふ。とまじ。時の美雅
とあひませませ。詮方の由。勿論。さ方ハ孫念に。二
と下らぬ大を限。私風情ハ大を屋の。お版。林大。小由

おこ こころ つとま な ま
劣つて身か。家後あきらむ苦せゆあらうぞ。まづお産
とく あま ま あま あま
い右も左も同ト町人とあひまをまじへ一寸の雲も
とぶ あま あま あま あま
五部の魂を世間の穢れと。面削ありんをさげしまた。
えん あま あま あま あま
今日の家裏を。世にひ返後おあがまらん。お持て帰
つてその通し。丈夫あまのさあへん。空しのあうふ。お持て中
ま あま あま あま あま
まといひ持て。母のあまぞ入あけ。

嵯峨迺假寐卷之十五 後

士力

